

詠風集

十一月号



花鳥諷詠

11月号 (452号)

日本伝統俳句協会

花鳥諷詠選集

● 今井肖子 選

特選五句

手秤にずしりと旨さトマト切る

伊賀 中島 庸子

おかへりの言葉に揺らぐ門火かな

兵庫 清水 貴美代

お雛子の中へ駆けゆく祭髪

大川 今泉 美代

和菓子屋のアイスクリームよく売れて

白山 西 登美枝

今年また小さくなりたる踊の輪

伊賀 池 本 準 一

二句短評

一句目——収穫したトマトを手のひらにのせると、思った以上に重い。ずしりと旨さ、という表現もさることながら、翳ったりせず、切る、と言い止めてみずみずしい断面が見え、よりいっそう美味しそうだ。

二句目——そつと眩く、おかえり、のひとこと。それに応えるかのようにかすかに揺らぐ門火。同じ様な経験を詠んだ句はあると思うが、言葉とは思いを伝えるためのもの、ということであらためて感じさせられる。

入選六十句

眩しさを傾けて来る白日傘 高松 岡田 貞幹

言訳を聞いてくれさう合歓の花 福岡 西村 芳山

束の間の稲の花時風を待つ 和歌山 市ノ瀬翔子

海を見て海呑むやうにラムネ呑む 高松 多田 照代

どこに匙入れるか迷ふかき氷 加賀 出島 達子

子供には子供の掟赤のまま 横浜 黒山 敏恵

引き揚げの思ひ出しかと終戦の日 海老名 野村香代子

折鶴や八月の黙たたむかに 石川 白根 寿子

風生れて滝のしぶきの届く距離 鹿児島 西村 セツ

更衣へてふと残されし日日のこと 高松 肥塚 英子

ひらきても折り目正しき桔梗かな 宇部 小林めぐみ

新涼や目のこまやかな青畳 天理 松田 吉上

炎天下選挙ポスターまだ貼られ 名古屋 浅井ひと詩

端居して幸せさうな愚痴を聞く 太宰府 川路 泰子

住み慣れし家との別れ草の花 輪 島 向 佐子

歪みたる人も車も炎天下 金沢 村本寿美枝
 みんな蟬ばかりや首相官邸前 東京 黒島 流世
 ボンネットバス向日葵の畑より 高知 駒木 基克
 客層の変はりし電車夏休 久留米 吉田いずみ
 料亭の消え打水の無き通り 徳島 遠藤 和良
 古民家と呼ばれし生家百日紅 福岡 平山 順子
 夜濯の軽くしほりて浜の風 富山 高城 玲子
 捨つるもの多き身ほとり秋暑し 堺 山戸 暁子
 兵児帯をゆらし駆け入る踊の輪 千葉 駒井ゆきこ
 復興の大きな桃を剥きにけり 仙台 情野 容子
 慰霊碑の文字の薄れや夏の果 福岡 深瀬 直治
 終戦日大人ら泣くを見し記憶 長岡 安井 里子
 飛び起きて昼寝だつたと気付くまで 久留米 野口 桂子
 日盛や暗き昔の台所 袋井 湖東 紀子
 裏山の崩れんばかり蟬時雨 神戸 塩見 成子

落人の里の宿りや星月夜 西宮 山谷 彰子
 住みなれし庭の名残りの萩を刈る 神戸 平田 恵
 音楽は要らぬ三尺大花火 長岡 岸 祥子
 日のあふれ日傘あふるる交差点 幸手 中野 典子
 炎天や鎖骨に歪むネックレス 福岡 棚瀬 弥生
 太陽の貼り付き日傘重しとも 神戸 齊木 富子
 息長く線香花火を全うす 高松 白根 純子
 全身を山気に預けハンモック 吹田 河辺さち子
 一日の疲れをたたむ白日傘 鳥取 砂流 育子
 芙蓉閉づ狭庭の日差抱きつつ 富田 尾崎 千鶴
 草原の風を刻んで雪加啼く 井原 鈴木 千恵
 立秋の渚に光る石白く 札幌 置田 正子
 白鷺の番際立つ青田かな 高松 池田 裕子
 仏壇にでんと置きたる西瓜かな 那珂川 池田ひさ絵
 一滴の香水変へてゆく世界 鳥取 椋 誠一朗

● 赤間 学選

特選五句

被爆手帳曝し老医となりにけり

丸亀片山千鶴

蛸や夕闇迫る五色沼

横浜秋吉美佐子

空のあをひときは深き終戦日

東京藤森莊吉

山一つ隔て聞ゆる風の盆

山形布川國雄

杉の香の大屋根リングゐて涼し

姫路上原康子

二句短評

一句目——季題は「曝し」で晩夏。「曝書」のこの行事はもう何年経つのであろうか。この時期に被爆手帳を手にして干して、風に当ててその事実を身に置く。事柄を淡々と述べただけの事だが深く受け取った。

二句目——季題は「蛸」で初秋。夕闇の迫る頃何処からとなく澄んだ鈴を振るような「かなかな」の音がする。その声は哀れさがあり、裏磐梯の五色沼への読者の思いが沁みて来る。

すつきりとばりつと西瓜真つ二つ 福岡 野口 明子
 月涼し今を忘れてゆく人と 鹿児島 松元 靖子
 廃屋の侘しさつのる昼の虫 芦屋 山岸 正子
 サンガラスとれば昔のままの海 松山 門田 智子
 新豆腐田舎醬油を二三滴 東京 寺崎三枝子
 考ふる葦とはなれぬ極暑かな 福岡 今中 榮泉
 我の背を叩くが如き蟬時雨 松江 三浦 純子
 金婚のふたりでひとつかき氷 始良 田畑 茅花
 手応へのはかなき綱や迎鐘 京都 大黒ひさゑ
 掃苔や人の背に距離置きながら 朝来 枚田登志子
 緑蔭を出て吾の影戻り来る 大牟田 藤好 信子
 朝曇百人分の炊き出しへ 山口 辻岡 伸子
 取り出せる登山靴より富士の土 鹿児島 亀割 芙蓉
 生徒より校長先生日焼して 神戸 内田 泰代
 水引の花の奥なる藪深し 町田 小森まさひこ

入選六十句

子育てのたのしき頃やかき氷 松原 加藤 あや
 郭公や夕日に染まる蔵王山 宮城 山家登志子
 全山の命絞りて滝となる 浜田 福本 正巖
 子供には子供の掟赤のまま 横浜 黒山 敏恵
 集まれば娘等は饒舌ソーダ水 伊賀 松村 咲子
 折鶴や八月の黙たたむかに 石川 白根 寿子
 ひらきても折り目正しき桔梗かな 宇部 小林めぐみ
 絵団扇の風に乗り来る小言かな 吹田 北上美佐子
 新涼や目のこまやかな青畳 天理 松田 吉上
 冷奴京漬物に京醤油 東京 吉里ひとみ
 尋ねたきこと一つあり盆の月 安中 多胡恵美子
 雑踏の中の香水何処より 高槻 谷本 房子
 赤銅の日焼土方にある矜恃 札幌 齊藤 和加
 青空が嫌になるほど暑かりし 福山 広川 良子
 潮のかすかに届く夜の秋 小樽 伊藤 玉枝

朝顔のけふを励ましくる青 高知 坂本喜代子
 鉾過ぎて次の囃子の聞え来る 香芝 芳林 淳子
 夏瘦の身に若き日のワンピース 大阪 中本 宙
 古井戸と祖父の出番や大西瓜 三鷹 中田 祐子
 兵児帯をゆらし駆け入る踊の輪 千葉 駒井ゆきこ
 砂蒸しの顔一列に今日の月 稲沢 山田ひふみ
 タンカーの水脈まつすぐに湾の夏 始良 五反田加代
 蒙古斑見せて駆け出す裸の子 江津 安田 心道
 顕微鏡のぞく白衣や玻璃の火蛾 福岡 森田寿美子
 溪流の朝日の炙る蜻蛉かな 高松 佐々木 新
 風鈴のサヌカイトの音風を磨ぐ 高松 高橋 遥
 好きただけ持てと荷台の西瓜かな 鳥取 長安 節子
 一山のうねりとなりし蟬時雨 米子 中村 襄介
 古代史を語るナイルの星月夜 神戸 澤田 鈴子
 帰省の子しばし質問攻めにあひ 浜田 三沢 孝子

七夕の空を渡りぬ宇宙船	新見 黒杭 良雄
息長く線香花火を全うす	高松 白根 純子
山門を出てそれからの蟻の道	鹿児島 所崎 玲子
万物のひれ伏してゐる大旱	宇佐 尾崎 陽子
その先が知りたく日々の残暑耐ふ	八千代 向阪 由紀
立秋の渚に光る石白く	札幌 置田 正子
退院の夫へと傾ぐ日傘かな	神戸 岩水ひとみ
盆用意終へて仏と珈琲を	吹田 小井川和子
防空壕掘りし青春終戦日	長岡 佐藤 文子
ねぶた果つまでの笛の音惜しみけり	青森 七戸富美子
西日浴び選手宣誓揺るぎ無く	三木 内田 幸子
我が眉の細きは母似夢二の忌	吹田 生澤 瑛子
サンガラスとれば昔のままの海	松山 門田 智子
富岡の土産にひとつ絹団扇	大阪 酒井 湧水
独り身を己が祝つて生身魂	井原 坂本 一恵

ジャズを聞き翁鋏打つ今朝の秋	茨木 庵原 通子
朝顔や朝な朝なの色と数	神戸 田中 由子
母の歳越え来て母の墓洗ふ	高松 金澤 正恵
鯉づくしまづは湯引きのガラス皿	神戸 谷本 逸歩
閃光に溶けし命や被爆の日	長崎 吉田 睦子
掃苔や人の背に距離置きながら	朝来 枚田登志子
新盆の母へ追慕の新たなり	福岡 中野 弘子
大文字筆太となり浮き上がる	大津 伊藤 薫
願ひ鳴る百の風鈴山寺に	徳島 石川 富子
迎へ火に語りたき事多かりき	東京 今井 禮子
碑に風の景ありねこじやらし	鹿児島 萩尾 葉月
双塔の鐘の音響く原爆忌	諫早 榎本喜美代
じつくりと煮込み料理の卓晩夏	白山 辰巳 葉流
引き揚げの記憶もうすれ終戦日	井原 齊藤ノブ子
蜻蛉の翅に指紋の痕白し	前橋 戸所 理栄

花鳥諷詠®

令和7年11月 ■ 第452号 ————— 目次

花鳥諷詠選集	今井 肖子 2
	赤間 学 4

この人の作品	若杉 朋哉 7
--------------	---------------

オンライン講座レポート

「虚子は無季を認めた？ 認めない？」	峯尾 文世 8
--------------------------	---------------

一頁の鑑賞	藤森 荘吉12
	渡辺 檀13

立子とブラジル俳句 (2)	井上 泰至14
---------------------	---------------

書評 本郷桂子句集『紫雲木』

見えるもの 香るもの	酒井 湧水16
------------------	---------------

新刊紹介	17
------------	---------

虚子研究 『六百五十句』 研究 (69)	18
----------------------------	---------

難読季題練習帳 (十一月)	井上 泰至26
---------------------	---------------

カレンダーこぼれ話②	28
------------------	---------

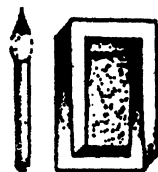
卯浪	29
----------	---------

地区行事開催日程表	31
-----------------	---------

編集後記	32
------------	---------

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

表紙 川端龍子「桑港」（「ホトトギス」大正2年7月号）



編集後記

映畫出て火事のポスター見て立てり

虚子

直接火事を目にしたのではなく、ポスターの中の火事、あるいは火事の注意喚起を詠んだところに軽い「間」と笑いがある。(鴨の中の一つの鴨を見てゐたり)「川を見るバナナの皮は手より落ち」など、やや呆然とモノを見て立ち尽くす有様を詠んだ句がある。絶妙の力の抜き具合で、その滑稽からは、不気味さや虚無の感じも匂ってくる。十一月という、昏さが際立ち、すべてが頹廃していく季節に、これらのポーっとした句は相性がいい。

○オンライン講座の報告記事を書きました。虚子は無季句を認めたか否かというテーマがテーマだけに、協会外からも注目されたようです。無季か有季かという単純な対立の見方ではすくいきれない、虚子の奥行きのある俳句観が浮かび上がってきます。多くを包み込みながら、大切なものは何かを主張しつづける虚子の姿勢は、伝統俳句の可能性を拓くものと思います。

○協会賞の締め切りが、十一月末に迫っています。自分の俳句を見つめ直す格好の、この機会を是非ご活用ください。

○「ホトトギス」の価値ある書画を配した協会のカレンダーも、楽しみながら俳句に資するものとなっています。伝統俳句の時間を共有できる仲立ちでもあります。

○この人の作品の若杉朋哉氏は、無所属ながら、昨年の角川俳句賞を受賞された方です。虚子をこよなく愛し、同

志を求めて入会されたとのこと。

○国際俳句シンポジウムの申し込みは、直接芭蕉記念館で受けます。十一月九日九時から電話受付開始です。事務局では対応しておりませんので、間違えなきよう。

○寄付金募集ですが、一定の人数が揃わないと優遇措置が受けられません。ご協力よろしく願います。

(井上泰至)

花鳥諷詠十一月号(通巻第四五二号)

定価一、二〇〇円 但し、本代は年会費に含む

年会費一〇、〇〇〇円

令和七年十一月一日

発行人 井上泰至

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二一八九

シャンブル笹塚二一B一〇一

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五四五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇一七二八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一一九二